

## 国保税引き上げやめて！ いっきに17%、県下トップの高額に

3月予算議会に、鈴鹿市の国民健康保険税を平均17%も引き上げる条例改定案が出されました。そのまま実施されれば、鈴鹿市は三重県の市町の中で、1人当たり負担額がトップになります。増税幅は世帯構成や所得によって変わりますが、全世帯が8.5%～25%の引き上げになり、ただでさえ暮らしがきびしい今、市民生活への大きな打撃になります。

この増税案にたいし、昨年未から鈴鹿社保協（鈴鹿市社会保障推進協議会）の各団体から撤回を求める要請が何度も行われ、また市の国保運営協議会でも、委員から引き上げ反対の意見があがっていました。しかし末松市長は、これらの声を聞くことなく、国保財政が赤字だからやむを得ないとして、増税の議案を提出しました。

### 一般会計から国保への財政支援、どうしても必要

3月8日の市議会本会議・一般質問で、私は国保税の増税をやめるよう求めました。私以外に森田英治議員・明石孝利議員も、増税について質問しました。10日の生活福祉委員会では、橋詰圭一議員が増税反対でがんばりましたが、条例改定案・予算案とも賛成多数で可決されました。24日に開かれる本会議の採決で、最終的に賛否が決定される予定です。

私は質問の中で、本年度(2015年)も国保会計は6億円の赤字が想定されていたが、末松市長はいったん出しかけた15%増税案を撤回して、増税しなかった。そして赤字を一般会計からの補てん3億円+借入金で穴埋めすることにした。しかし来年度(2016年)は、同じように6億円の赤字なのに今度は1円も補てんせず、すべて市民の負担でまかなおうとしている。昨年も今年も、経済情勢・市民の暮らしは変わらず、むしろ悪化しているのに、財政的な対応はまったく逆になっているではないか、と批判しました。(次ページへ)

私は15年度の対応（赤字補てん）は良いことで、16年度（補てんナシ、増税）が間違いだ、一般会計からの繰り入れをするべきだと主張しました。国保財政の赤字は、全国の自治体共通の問題であり、多くの自治体で繰り入れ補てんを行なっています。また国も低所得層の負担をへらすため、15年度から1700億円の支援制度（鈴鹿市分1.6億円）を始めているほどです。

## 国保は社会保障制度、市民のセーフティネットだ

市当局のこれまでの議会答弁の中でも、国保加入者の半分以上が60歳以上の高齢者、年金生活者であり、低所得で半数が軽減措置の対象になっているという構造的な問題があること、会社や仕事を辞めた人を受け止める「セーフティネット」の役割を果たしていることは、共通認識になっています。

しかし実態はそうならないことを、私は事例をあげて示しました。例えば「40代夫婦・子2人・所得200万円」の世帯、生活費は月17万円で、この世帯の「生活保護基準額」月18万円を下回ります。この世帯の国保税は、現在32万5200円、引き上げ後は40万6100円！保護基準以下の世帯が、こんな重税をどうして払えるでしょうか？

また、この世帯が社会保険加入なら、保険料は17万7千円（協会けんぽ）で、国保の半額です。いかに国保税が高いかは、だれの目にも明らかです。

このように大きな制度的矛盾をかかえる国保の、格差の緩和、市民の負担を軽くするために、市として出来ることは、一般会計からの繰り入れによる支援です。年3億円ほどの繰り入れはどうしても必要です。「赤字だから値上げする」では、市民の暮らしがつぶされてしまいます。末松市長の姿勢を変えてもらうために、さらに市民の声を届け続けていきます。

---

## エッ？市長ら特別職の手当はアップ

市民への増税の一方で、市長、副市長、議員など特別職の「期末手当」を年間0.1月分引き上げる条例案が8日の本会議で追加提案され、10日の総務委員会で賛成多数で可決されました。そのまま実施されれば、市長の給与は年間12万7千円、議員の報酬は年間5万8千円ほど増えます。

私は総務委員会で、市民に大增税を負わせる議案と、自分の給与をアップする議案を同時に出してくる末松市長の見識を疑う、こんな議案は撤回すべきだと、反対を表明。他に2議員が反対しました。

# 新名神開通まで3年、開発計画も

市西部の山沿いを通る新名神高速道路の工事が進んでいます。すでに亀山に抜ける延長4キロの「野登トンネル」が貫通、高架の橋脚工事も急ピッチで進み、周辺の景観が大きく変わってきました。椿小学校の北には、鈴鹿PA用地の巨大な「山」が出来ています。3年後の2018年度に完成・開通の予定です。



新名神高速道路の工事現場（山本町）

## 鈴鹿PAスマートICの周辺に企業誘致の構想

鈴鹿PAからETCで出られる「スマートインター」が設置されますが、その出口の椿地区で、区画整理方式で開発を行ない、企業誘致をはかる計画が立ち上がりつつあります。市の2016年度予算に、その調査費2600万円が計上されました。今年は、区画整理組合の設立などが予定されます。

しかし今のような景気低迷の時期に、新規投資をして進出してくる企業があるかどうかは、未知数です。事業を先行させ、用地が出来てから企業を探すという方式では、大きなリスクがあります。かつて伊船工業団地が、進出企業が決まらず長期間空き地だったという苦い経験もあります。市主導でおこなう開発計画は、先の見通しをしっかりと示すことが求められます。

---

## 山歩きでストレス解消、花粉症が軽くなった

3月議会の合間の一日、年金者組合の山歩きに参加しました。亀山市関町の



の羽黒山、筆捨山、観音山、関富士の4峰を踏破、といっても低山めぐりのハイキング。でも延べ4時間半、登り下り歩きました。久しぶりの山行きで疲れましたが、気分は上々。

花粉症で不快な毎日を過ごしていましたが、汗をかいて歩いているうちに症状が治まったというお得な副作用も。

ずいそう



## テレビに映った1960年代

私が子どもだった1960年代、日本が戦後の混乱から復興・成長に転じ、貧しいながらも徐々に暮らしも向上していったあの時代。その象徴といえる出来事は、家庭にテレビが入ってきたことだった。毎日夢中になって画面に見入ったテレビ、そこには夢と明るい未来があった。そんな時代を振り返った2冊の本を、近ごろ書店で見つけて読んでみた。

### 奇想天外な人形劇「ひょっこりひょうたん島」

当時子どもだった人なら、今でもだれでも歌えるのが人形劇「ひょっこりひょうたん島」のテーマソング。その生みの親、元NHKディレクター・武井博氏の著書「泣くのはいやだ、笑っちゃおう」（アルテスパブリッシング社）を読むと、こちらも50年前の少年に戻っていく。番組スタートは1964年4月、終了の69年4月まで5年間、日本中の子どもたちに親しまれた。

ある日、ひょうたん山の噴火をきっかけに、島が陸から離れて漂流し始めるという奇想天外なストーリー、登場人物も個性的でクセのある者ばかり。ドン・ガバチョ大統領、海賊トラヒゲ、マシンガン・ダンディ、サンデー先生、博士くん、魔女リカなどなど。この物語の脚本家・井上ひさし・山本護久、武井ディレクター、みんな20代という若さだったというのも驚きだ。

### 世界的名曲となった「上を向いて歩こう」

60年代を音楽の面から振り返ったのが、佐藤剛著「上を向いて歩こう」（小学館文庫）である。この本も読んでいくと、テレビでいつも観ていたバラエティ番組「夢であいましょう」「シャボン玉ホリデー」の世界に戻っていく。

「上を向いて歩こう」が生まれたのは1961年、作詞・永六輔28才、作曲・中村八大30才、歌手・坂本九19才の「689トリオ」で、大ヒット曲となった。今も私たち前後の世代はもちろん、若い人たちにも歌われている。悲しい歌詞なのに歌うと何か元気が出るような、不思議な歌である。また、この歌はアメリカ・ヨーロッパに渡り、ビートルズを上回るヒットを記録した、これも驚きだ。60年代には「なつかしい」だけではない、何かがあった。